平和

安野発電所 中国人強制連行と広島での被爆



安野発電所への強制連行の実態をまとめた冊子

二重の苦しみ 冊子に刻む

太平洋戦争中、広島県安芸太田町の安野発電所の建設工事に中国人が強制連行された事実を伝える冊子が完成した。元労働者と遺族を支えてきた市民団体が、30年を超す活動の記録を後世に残そうと集約した。移送先の広島市内で被爆した本人たちの証言などを収め、戦争が負わせた二重の苦しみを克明に刻んだ。

事実の掘り起こしも進めた市民団体「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」が編集した。タイトルの「生きてこられて不思議だ」は、元労働者の言葉を引用。突然日本へ送られて重労働を強いられ、帰国後も苦しい生活に耐えた生涯を象徴する。

証言は、被爆した元労働者11人と遺族2人を収録した。「牛や馬よりもひどい待遇を受けた」と語った男性は、収容所で起きた暴動を理由に逮捕され、爆心地から約2キロの広島刑務所へ送られた。原爆の閃光と爆風を浴びた瞬間を振り返り、戦後は「わけもわからず体がだるかった」。がんに侵され「私の円満な家庭をバラバラにした」と訴えた。

安野発電所には中国から360人が連行され、劣悪な環境下でトンネル掘りなどをさせられた。1945年8月6日、暴動など二つの事件で逮捕された計19人が被爆し、うち5人が死亡した。

元労働者の生存が明らかになった92年、日中の有志が消息調査と証言の聞き取りを始めた。地道な取り組みは、工事を請け負った現在の西松建設（東京）に補償を求める運動に発展。和解が成立し、記念碑の建立や遺族の訪日が実現した。

元労働者や遺族の証言 市民団体集約

それでも史実の風化が進み、同会は証言の録音テープを聞き直して冊子に残そうと決めた。国策として強制連行が実行された時代背景も解説した。事務局長の川原洋子さん(76)＝広島市西区＝は「安野」を語り継ぐことは戦争の悲劇を繰り返させないことにつながる。若い人に読んでほしい」と呼びかける。

A4判127ページで千部を作成。1500円。市内の公立図書館などに寄贈する予定。川原さん☎080(3880)8340。（山本祐司）